

# 博士学位論文審査要旨

2013年2月8日

論文題目： 村落の文化系統学的研究：  
飛騨地方の明治初期物産誌『斐太後風土記』を対象に

学位申請者： 松森 智彦

審査委員：

主査： 文化情報学研究科 教授 矢野 環

副査： 山口大学大学院教育学研究科 教授 五島 淑子

副査： 文化情報学研究科 教授 川崎 廣吉

要旨：

本論文は、系統学的手法を用いた村落研究である。明治初期の飛騨地方の415村落についての地誌である『斐太後風土記』を対象とし、そのうち村落の生産物の構成と収量の部分を使用している。本研究では、村落の産物構成を0・1の2元データとし、全村を地理的に近接する13地区に分解して、各々において、系統樹作成法の一つFastMEのBME基準(Balanced Minimum Evolution Criterion)による手法を用いて系統樹を作成している。そしてこの系統樹を切り口に、生産物の構成について分析し、村落の生業また経済について人文学的に考察するという、文化情報学的構成となっている。

本研究の意義は二つの点に認められる。一つは、系統学的手法を村落研究に適用した、という点である。従来、系統学的手法は生物学また写本文献学や系統言語学での利用が主であった。これは祖先子孫関係のメカニズムが、遺伝また写字や言語継承と明らかになっているからであり、広義における進化と認められている。村落には親村—支村(枝村)という祖先子孫関係があるが、文献等により明確に確認できる例は多くない。また産物構成は、先天的なものだけではなく、隣接村との血縁・地縁関係の中で後天的に類似することも多くある。このような理由もあり、歴史学とくに村落研究における、系統学的手法の本格的実践例を聞かない。本研究では系統学的手法を村落の歴史的系譜の推定のためではなく、データ整理の一手法として用いている。FastMEによる13の系統樹を、産物構成の類似性より村落を階層化したものとみなし、そのグループの各村での特徴的な産物を選定しており、その手法に新規性が認められる。全村での系統樹もNJ法により作成確認しており、産物選出の目的以外にも今後有効となるであろう。

第二の意義は、手工業製品について考察した『斐太後風土記』の新研究という点である。『斐太後風土記』は、36年前からデジタルデータ化が進められ、申請者自身はその最終段階に関与した。また様々な成果が報告されてきた。しかしそれらの多くは「自給自足的な山村」という視点より研究が行われており、手工業製品の生産また売買についての論説は厚くなかった。本研究では、415村落の、手工業製品も含めた生産物について分析・考察することにより、自給自足的な山村、貧村史観を廃したより実態に近い村落像を描き出すことができていると判定される。

よって、本論文は、博士(文化情報学)(同志社大学)の学位を授与するにふさわしいものであると認められる。

## 総合試験結果の要旨

2013年2月8日

論文題目： 村落の文化系統学的研究：  
飛騨地方の明治初期物産誌『斐太後風土記』を対象に

学位申請者： 松森 智彦

審査委員：

主査： 文化情報学研究科 教授 矢野 環

副査： 山口大学大学院教育学研究科 教授 五島 淑子

副査： 文化情報学研究科 教授 川崎 廣吉

要 旨：

学位申請者は2010年4月より本学大学院文化情報学研究科博士課程後期課程に在学している。各年度において、優れた研究成果をあげている。また総合地球環境学研究所でも共同研究を行っており、新聞記事にも取り上げられた。

語学については、文化情報学研究科の定める語学試験（英語）に合格している。

また申請者はJADH 国際会議において英語により口頭発表を行なっている。

2013年2月8日、午後3:30より公聴会を開き、申請者による1時間の講演と、30分の質疑、さらに非公開の1時間の口頭試問と30分の審査会を行った。質疑は、『斐太後風土記』の原本についてのこと、文化的観点について、数理的処理についての各々の観点から行った。申請者は、研究内容ならびにそれに関係する種々の質疑に的確に対応し、論文の学術的価値を示すとともに、申請者に十分な学識のあることが確認された。

以上のことから、学位申請者の専門分野に関する学力および語学力は十分なものであることを確認した。よって、総合試験の結果は合格であると認める。

# 博士學位論文要旨

論文題目： 村落の文化系統学的研究:  
飛騨地方の明治初期物産誌『斐太後風土記』を対象に  
氏名： 松森 智彦

## 要旨：

本研究の目的は、系統学的手法を用いた村落研究の実践例を示すことである。対象とする資料は、明治初期の飛騨地方の物産誌である『斐太後風土記』である。本研究ではこの『斐太後風土記』をリレーショナルデータベースに格納した『斐太後風土記』データベースを用いる。筆者はこのデータベース構築に参画しており、成果の研究活用ということで、博士論文での利用を行なっている。このデータベースには飛騨地方の3郡25郷の415村落について、その生産物の構成と収量が格納されている。本研究では、村落の産物構成を0・1の質的データとし、BME基準によるFastMEを用いて系統樹を作成する。そしてこの系統樹を切り口に、生産物の構成、収量の特徴について分析し、村落の生業また経済について人文学的に考察する。

本研究の意義は二つある。一つは、系統学的手法を村落研究に適用した、という点である。従来、系統学的手法は生物学また文献学の写本系譜での利用が主であった。これは祖先子孫関係のメカニズムが、遺伝また写字と明らかになっており、適用しやすかったためと思われる。村落には親村一支村（枝村）という祖先子孫関係があるが、文献等によりはつきりと確認できる例は多くない。また産物構成は、祖先子孫関係による先天的なものだけではなく、隣接村との血縁・地縁関係の中で後天的に類似することも多くある。このため、産物構成の類似から村落の歴史的系譜について推定するのは困難である。このような理由により、歴史学とくに村落研究における、系統学的手法の本格的実践は例を聞かない。

しかし、本研究では系統学的手法を村落の系統推定のためではなく、データ整理の一手法として用いることにした。本研究で用いているBME基準によるFastMEは、0・1データより作成した距離行列から、最小進化基準にもとづいて枝の総和が最小となるような系統樹を作成する方法である。祖先子孫関係のメカニズムが、親村一支村関係によるものか、血縁・地縁関係によるものかわからず、系統樹を描き出してくれる。出力された系統樹は、産物構成の類似性より村落を階層化しており、その理解と説明に大いに役立つ。またこの方法は再現可能な手続きに基づいており、研究の累積的發展に資する。

もう一つの意義は、手工業製品についても考察した『斐太後風土記』の新研究という点である。本研究が対象とした『斐太後風土記』は、古くより研究がなされ成果が報告されてきた。しかしそれらの多くは自給自足的な山村、という視点より研究が行われており、手工業製品の生産また売買についての論説は厚くなかった。本研究では、415全ての村落の、手工業製品も含めた全ての生産物について分析・考察することにより、自給自足的な山村、貧村史観を廃したより実態に近い村落像を描き出すことができると考えている。

第一章では、まず生物系統学における系統学的手法について整理を行った。本研究においては、系統学的方法とは生物系統学において系統推定に用いられている方法を指す。系統推定とは、三中信宏の定義によれば「生物に関して現在入手できるさまざまなデータに基づいて、それらの生物がたどってきた進化の歴史、すなわち系統発生を復元すること」とされている。系統発生は系統樹をもって示されることが一般的であるため、系統学的方法とは、具体的にはなんらかの系統樹を作成する方法と考えてよい。ここでは、系統樹を作ることが、なぜ系統発生の復元に繋がるのか論じる。第3節では、文化系統学について矢野環らによる文献学、また中尾央らによる最新の論集を合わせて文化系統学の

概念について論説した。そして、本研究における文化系統学の定義について次のように示した。文化系統学とは文化的事象を対象に系統学的手法を用いた諸研究を指すこととする。ここでいう系統学的手法とは、主に生物系統学で用いられている距離行列法などの系統樹作成法を指す。生物系統学は歴史的系譜の考察を目的としているが、文化系統学ではかならずしも歴史的系譜の考察を目的とはしない。第4節では、本研究で用いる方法について詳しく論説する。本研究で用いる系統樹作成方法は、距離行列法の、BME基準によるFastMEである。この方法に直接関係のある最小進化法と近隣結合法について説明し、BME基準によるFastMEを選択した経緯について説明した。

第二章では、『斐太後風土記』と先行研究についてレビューした。『斐太後風土記』とは明治六年(1874年)に完成した岐阜県飛騨地方の地誌である。編者は飛騨の地役人である富田禮彦である。明治二年に、宮原大輔の命を受け編纂に着手し、明治六年にこれを完成させている。この資料には飛騨地方の3郡415村落について、人口、戸数、石高、産物など、詳しく記載されている。この資料については芳賀1988、江原1989など多くの解説がある。ここではそれらを引用しながら、資料の紹介を行う。また、第2節の『斐太後風土記』を用いた従来の村落研究では、小山修三らによる国立民族学博物館を中心とした研究プロジェクトを主とし、その研究史を振り返る。第3・4節では本研究において使用した『斐太後風土記』データベースと『斐太後風土記』GISについて、その仕様と特徴について説明した。

第三章では『斐太後風土記』に記載されている人口、産物について、その全体的傾向を知るための定量的分析を行った。人口からは、90人以下のような零細村は、全体の人口の8.4%とごく一部であることがわかった。産物については、それぞれの記載頻度について評価し、9村以下と記載頻度の低い産物が、全体の62.9%を占めることを示した。また、産物の生産量と人口から食糧の充足について検討し、穀物が主な食糧であったこと、移入穀物がなければ人口を支持できないことを示した。あわせて、主な商品作物、手工業製品について検討し、現金収入は主に繭と生糸から得ていたことを示した。

第四章では、飛騨の村落を13の地域に分割し、それぞれの地域ごとに系統樹を作成して村落の階層化を行った。系統樹の分岐点ごとに共通特性の計算を行い、特徴的な産物を特定した。地域1・2・3・4・5・9・10・11・13では、村落の地理的分布と系統樹上のグループが比較的良好に対応した。一方で古川、高山盆地に位置する地域6・7・8では、うまく対応しなかった。また、益田郡の小坂・上呂・萩原・中呂・下呂・竹原郷地域(地域12)でも、対応しなかった。

第五章では、前章において作成した地域ごとの系統樹について、地域間比較を行った。これは各地域において検出された産物が、普遍的なものか、地域固有のものか、二、三の地域にのみ検出されるものか、明らかにするためである。結果、普遍的な産物、地域固有の産物については多く検出できたが、隣接する複数の地域を関連付けるような産物は、あまり見つからなかった。これは、普遍的な産物を除くと、村々の産物構成は地域を越えて共有されないことを示唆する。また第3項では、飛騨の村落の環境適応のモデルを示し、各村落はそれぞれの自然・社会的環境に適応し、自給自足・商品経済の両方の側面を持っていたことを論じた。

第六章の第1節では、本研究で用いた方法の有効性について、定量的評価を行った。産物の網羅率については、全391品目のうち83.9%について言及しており、良好な結果といえる。BME基準による樹形の比較では、近隣結合法、最小二乗法によるFastME、クラスター分析(Ward法)に比べ、本研究で用いたBME基準によるFastMEが最良の結果を示すことを明らかにした。地域区分の有効性については、本研究で行った地域分割では、全村落で系統樹を作った際の、1.6倍の特徴的な産物を検出していることを示した。